

徳山大生における ボランティア活動の現状と課題

佐 原 昌 弘

はじめに

昭和58年、当時学生部長として教育現場の最前線にいた私は、学生の精神的自立の重要性を痛感し、本学の教育理念の一つでもあった徳育教育の実践を思い立った。もちろん私にとっては専門外の領域であったということ、さらには徳育という人間固有の精神的資質をストレートに教育という名のもとで、学生に強要していいものかなど、多くの問題点を抱えていることは承知のうえであった。またそれらに対する私への批判も覚悟していた。しかしそれでもなおこの徳育教育を実現させようと考えたのは、当時の学生指導上の事情があった。紙面の関係もあり、ここでは詳しく述べることはできないが、当時の学生指導の前線にいた教職員は全員、この徳育教育には大きな期待を抱いていたのである。そして、その徳育教育の方法論としてボランティア活動の実践面を中心にして行ってきた。また課外活動においてもボランティア活動を実行するクラブが誕生し、活発な活動を続けてきた。この二つの活動は、今まで数々の表彰を受け、大学教育におけるボランティア活動の草分け的な役割を果たしてきたのである。そこでこの活動も15年という歳月を経た現在、本学の学生たちがボランティア活動を、その実践面や意識面でどれくらい理解をしているかを調査し、その結果に対する若干の考察を試みたいと思ったのである。

調査方法としては、無作為による本学学生487（女性38）名に対するアンケート調査（調査時期：平成10年7月）に依った。尚、調査項目は内外学生

センターが平成9年12月に行った「学生のボランティア活動に関する調査」を参考にして作成したものである。

I ボランティア活動の現状

(1) 徳山大生の体験者

私は、15年前、本学の「実践教育講座（ボランティア学習）」を開設するに当たって、近い将来少子化現象による生産的労働者の減少を婦女子の労働によって補っていかねばならないだろうと考え、現在のボランティア活動の中心的担い手である婦女子に代わる担い手として高等教育機関の学生たちに期待したのである。

本学学生においても今回の調査では、女子学生の体験者比率が高く、「現在している」学生が女子学生全体の21%、「以前したことがある」学生が52.6%となり、合わせると73.6%もの女子学生が何らかの形でボランティア活動に携わってきたことが分かる。反対に男子学生においては、「現在している」は6.7%となり、「以前したことがある」が44.5%となっている。合わせても51.2%で女子学生と比較すると随分少ない。まだまだ婦女子がボランティア活動に果たす役割は大きいと言えるだろう。

また本学学生全体では、「現在している」が7.8%、「以前したことがある」が45.2%となっている。それらを合わせたボランティア体験者は53%となり、徳山大生の半数以上が体験者ということになる。前述した内外学生センターが平成9年12月に行った大学生に対する全国調査では、「現在している」学生が7.2%、「以前したことがある」学生が33.5%となっており、両方を合わせた体験者でも40.7%であり、本学学生のボランティア体験者数の方が遙かに上回っていることが分かる。それはまた、本学学生のボランティア活動に対する理解度を示す上でも貴重な数字であると思われる。

表1 ボランティア活動体験の有無
(内外学生センターの全国大学生調査)

	現在している	以前にしたことがある	全くしたことがない
総数	7.2	33.5	59.1
男性	6.3	28.7	64.7
女性	8.7	41.1	50.1

※単位は全て%

表2 ボランティア活動体験の有無
(徳山大学生)

	現在している	以前にしたことがある	全くしたことがない
総数	7.8	45.2	47.0
男性	6.7	44.5	48.8
女性	21.0	52.6	26.4

※単位は全て%

(2)徳山大学生のイメージするボランティア活動

現在、私は山口県ボランティア推進委員として県下のボランティア活動に関係しているが、その活動分野を見てみると、それほど多様性に富んだものとは言い難い状況なのである。現代文明の特徴である複雑化した社会の隙間を埋め合せていこうとする、いわば学際研究にも似たこの活動の性質上、いたるところにそのテーマは見つけられるはずであるが、実際には非常に難しく、限定された分野に集中している。そこで若い学生諸君に、今まで経験してきた活動と同時に、彼等がイメージとして考えているボランティア活動も答えてもらうことにした。

まず体験者の中で、もっとも多かった答えは「お年寄りや障害を持つ人を助ける」(76%)であった。これはボランティア活動の原点とでもいえるべきものであって、多くの人達が参加をし、イメージする活動のようである。また本学の「実践教育講座」でも、独居老人の訪問や心身障害者施設の訪問を

行っていることが影響しているように思われる。

次に多かった答えは「自然や環境を守る」(64.7%)であった。これなどは、近年富に盛んになってきた自然・環境保護運動に触発されてのことと思われる。特に、それらの運動がマスコミに大きく取り上げられることも影響しているのではないだろうか。

三番目に多かったのが「国内の災害地での援助活動をする」(50%)であった。周知のように、阪神大震災やロシア船による日本海油流出事故などの被害に対して、沢山の人が援助の手を差し伸べたことは未だ記憶に新しいが、その時の若者たちの生き生きとしたボランティア活動が印象深かったのではないだろうか。

四番目以降は、残念ながら極端に少数であった。本学の学生は、上記の三項目をイメージして、ボランティア活動を位置付けているようである。

因みに前述の内外学生センターの調査では、体験者の中で一番多かったのが「子供たちにスポーツなどの指導をする」(46.6%)であり、二番目が「お年寄りや障害を持つ人を助ける」(36%)であった。

次に未体験者のイメージについてであるが、本学学生においては、体験者の順位と上位三項目は全く同じであった。その他の項目もまた、体験者の場合と同じように極端に低い数字になっている。前述の全国調査では、未体験者の場合、一番目に「自然や環境を守る」(39.9%)となり、「子供たちにスポーツなどの指導をする」(35.4%)が二番目に落ち、三番目に「お年寄りや障害を持つ人などを助ける」(24.9%)が来ている。このように全国調査では、未体験者のイメージするボランティア活動と体験者のそれとが異なるのに対して、本学学生の調査ではそれらが一致する点が注目されるところである。

表3 ボランティア活動の実際の活動分野とイメージする活動分野
(内外学生センターによる全国大学生調査)

	体験者	未体験者
子供たちにスポーツなどの指導をする	46.6	35.4
お年寄りや障害を持つ人を助ける	36.0	24.9
伝統文化やお祭りなどを守り育てる	10.7	17.5
地域で健康を守る活動をしたりする	10.2	15.3
国際交流に関する活動をする	19.8	24.5
自然や環境を守る	17.5	39.9
いきいきとした地域を作る	5.4	9.5
人々の学習を助ける	8.8	16.0
国内の災害地での援助活動をする	9.6	22.8
その他のボランティア活動	20.3	1.9
特になし	0	7.7
無回答	0.4	9.4

(複数回答) ※単位は全て%

表4 ボランティア活動の実際の活動分野とイメージする活動分野
(徳山大学生)

	体験者	未体験者
子供たちにスポーツなどの指導をする	21.7	14.8
お年寄りや障害を持つ人などを助ける	76.0	77.3
伝統文化やお祭りなどを守り育てる	12.0	9.2
地域の健康を守る活動をしたりする	10.9	8.7
国際交流に関する活動をする	12.0	17.9
自然や環境を守る	64.7	59.4
いきいきとした地域を作る	14.7	9.2
人々の学習を助ける	3.9	2.6
国内の災害地での援助活動をする	50.0	56.8
その他のボランティア活動	13.6	7.4
特になし	0.8	5.2
無回答	0	1.7

(複数回答) ※単位は全て%

(3)徳山大生のボランティア活動への動機ときっかけ

①活動の動機

次に、徳山大生がボランティア活動に参加する動機となる内面的理由を探ってみたい。そこで、体験者の回答からその数値を拾ってみた。まず一番多かったのが、「困っている人の手助けをしたいから」(29.8%)であった。次に多かったのが、「地域や社会をよりよくしたいから」(19%)で、それに僅差で「新しい人と出会いたいから」(18.2%)が続いている。地域や社会のためになることをお手伝いしながら、その中で自分の人生を少しでも充実したものにしていきたいという思いが良く現れている。また少ない方では、「自分の技術を生かしたいから」(4.3%)、「進学や就職に有利にしたいから」(4.7%)、「大学で活動を奨励しているから」(4.7%)となっている。

全国調査と比較すると、順位はほぼ同じであるが、ただ「自分の技術を生かしたいから」だけが徳山大生では非常に少ない。これは、本学が技術を習得しにくい単科大学のせいだと思われる。

表5 ボランティア活動をする動機
(内外学生センターによる全国大学調査)

	体験者	未体験者
地域や社会をより良くしたいから	22.4	22.6
困っている人の手助けをしたいから	39.1	50.7
自分のやりたいことを発見したいから	21.3	24.8
進学・就職に有利にしたいから	6.0	6.0
自分の技術を生かしたいから	16.8	26.2
新しい人と出会いたいから	30.9	35.4
新しく感動できる体験をしたいから	33.0	37.5
大学で活動を奨励しているから	4.8	0.7

その他	16.1	3.0
わからない	4.1	5.4
無回答	0.6	0.9

(複数回答) ※単位は全て%

表6 ボランティア活動をする動機
(徳山大生)

	体験者	未体験者
地域や社会をより良くしたいから	19.0	3.9
困っている人の手助けをしたいから	29.8	8.3
自分のやりたいことを発見したいから	9.7	9.8
進学・就職に有利にしたいから	4.7	3.5
自分の技術を生かしたいから	4.3	0.9
新しい人と出会いたいから	18.2	20.5
新しく感動できる体験をしたいから	4.7	5.2
大学で活動を奨励しているから	4.7	0.9
その他	14.7	2.6
わからない	8.5	20.5
無回答	14.0	59.8

(複数回答) ※単位は全て%

②活動のきっかけ

人間だれしも心の中では、沢山の欲求を持っているが、それを行動に移すときには、何らかの直接的なきっかけが必要な場合が多い。ボランティア活動も同じように、心では大いに関心を持っていても、いざそれを行為として表すことは大変難しいものである。そこで徳山大生のボランティア活動の直接的なきっかけを尋ねてみた。

徳山大生の体験者の中では、「サークルなどで参加する機会があって」

(30.6%)が一番多く、次いで「自分の所属する団体の活動などとして」(25.6%)、「自分の自発的な意思で」(20.5%)、「地域からの呼びかけに応じて」(19.4%)と続いている。これは全国調査でも同じような傾向がみられることから、やはり、ボランティア活動への参加の初期段階では、団体での参加や相手側からの積極的な誘いかけが必要のようだ。

また未体験者(徳山大生)の回答を見てみると、「わからない」(32.8%)や「無回答」(47.2%)が多く、両方で70%を越えている。正直な回答だと思われる。

表7 ボランティア活動への参加のきっかけ(総数)
(内外学生センターによる全国大学調査)

自分の自発的な意思で	52.0
家族や親戚に勧められて	6.7
友人や知人に勧められて	21.5
サークルなどで参加する機会があって	39.3
地域からの呼びかけに応じて	6.5
研修会、講習会、催しものなどに参加して	7.3
ポスター、チラシなどを見て	8.6
新聞、テレビなどのマスコミを通じて	3.8
自分の所属する団体の活動などとして	19.6
福祉・教育などの施設の呼びかけに応じて	3.8
その他	7.3
わからない	0.6
無回答	1.0

(複数回答) ※単位は全て%

表8 ボランティア活動への参加のきっかけ
(徳山大生)

	体験者	未体験者
自分の自発的な意思で	20.5	11.4

家族や親戚に勧められて	6.2	1.3
友人や知人に勧められて	7.4	3.9
サークルなどで参加する機会があって	30.6	5.7
地域からの呼びかけなどに応じて	19.4	5.7
研修会、講習会、催しものなどに参加して	8.1	2.2
ポスター、チラシなどを見て	1.2	2.2
新聞、テレビなどのマスコミを通じて	1.6	1.3
自分の所属する団体の活動などとして	25.6	4.4
福祉・教育などの施設の呼びかけに応じて	5.4	3.1
その他	9.3	3.5
わからない	3.9	32.8
無回答	3.9	47.2

(複数回答) ※単位は全て%

(4)徳山大生のボランティア活動の満足度とその理由

①満足度

ボランティア活動に参加して、彼等は果たして満足感を持ったであろうか。非常に気にかかるところである。その点についてアンケート結果は、体験者の中では、「満足している」(37.5%)、「満足していない」(4.6%)、「どちらともいえない」(45.9%)、「無回答」(22%)となっている。「どちらともいえない」の解釈が難しいところであるが、積極的に不満を示していないと理解すれば、今後のボランティア活動への参加も期待できる。

②満足理由と不満理由

それでは彼等がボランティア活動に参加して、どのようなところに満足感

を覚え、どのようなところで不満を感じたのだろうか。彼等は次のように答えている。

一番多かった満足理由は、「地域のために役に立ったと思う」(52.3%)、次いで「ものの見方、考え方が広がったと思う」(42.3%)、「思いやりの心が深まったと思う」(42.4%)、「人間性が豊かになったと思う」(36.0%)、「困っている人のために役に立ったと思う」(39.6%)となっている。他方、全国調査では「ものの見方、考え方が広がったと思う」(69.6%)、「友人や知人を得ることができた」(59.1%)、「人間性が豊かになったと思う」(51.4%)となっている。この満足理由に関しては、相当大きな違いがあるが、これは徳山大学の置かれた地域性に原因があると思われる。

次に不満理由であるが、本学学生達の不満回答は極端に少なく、あまり参考にはならないと思うが、その中でも比較的多かったのは、「思うとおりの活動ができなかった」(57.9%)、「活動が面白くなかった」(57.9%)、「継続的に活動ができなかった」(57.9%)などとなっている。全国調査でも「思うとおりの活動ができなかった」(50.0%)が一番多く、本学学生と同じ結果が見られた。

表9 ボランティア活動の満足理由
(内外学生センターによる全国大学調査から引用)

	全国調査	徳山大生
地域のために役に立ったと思う	22.3	52.3
困っている人のために役に立ったと思う	24.3	39.6
人間性が豊かになったと思う	51.4	36.0
思いやりの心が深まったと思う	37.8	42.4
生活に充実感ができたと思う	41.9	18.0
友人や知人を得ることができた	59.1	23.4
知識や技術が身についたと思う	41.6	11.7
ものの見方、考え方が広がったと思う	69.6	42.3
学校で評価された	2.4	2.7

報酬があった	2.4	1.8
福祉などに理解が深まったと思う	30.7	31.5
その他	6.8	5.4
わからない・忘れた	1.0	12.6
無回答	0.3	

(複数回答) ※単位は全て%

表10 ボランティア活動の不満足理由
(内外学生センターによる全国大学調査から引用)

	全国調査	徳山大生
活動が面白くない	8.1	57.9
経費がかかりすぎた	5.4	36.8
報酬がない	2.7	42.1
人間関係がうまくいかない	13.5	26.3
自分の時間が少なくなった	13.5	26.3
責任をとらされた	4.1	0.0
学校での評価がなかった	4.1	42.1
思うとおりの活動ができなかった	50.0	57.9
継続的に活動ができなかった	23.0	57.9
その他	43.2	26.3
わからない・忘れた		
無回答		

(複数回答) ※単位は全て%

(5)徳山大生が感じるボランティア活動への障害

ボランティア活動には参加したいが、どうしても踏み切れない、あるいは活動に参加してみたが、どうしても納得できなかったなどの障害要因について調査した。

本学学生にとって一番大きな障害要因は、体験者の中で、「情報が不足し

ている」(24.8%)であった。次いで、「大学の時間が忙しい」(21.7%)、「活動に要する技術や知識がない」(20.2%)などとなっている。一方、全国調査でも、体験者では「活動に要する技術や知識がない」(34.2%)、「大学の時間が忙しい」(30.7%)、「情報が不足している」(27.2%)となっており、上位三つは同じであった。

次に本学の未体験者でも、「情報が不足している」(29.3%)、「活動に要する技術や知識がない」(27.1%)、「大学の時間が忙しい」(16.2%)と上位三つは同じであるが、ただ学業が障害要因と考える学生が少なくなっていることは、面白い現象である。考えているより以上に現実の活動が、学業に差し支えるということかもしれない。

他方、未体験者の全国調査では、反対に「大学の時間が忙しい」(50.4%)と半数を越える学生が学業との関わりを心配している。

表11 ボランティア活動の障害要因
(内外学生センターによる全国大学調査)

	体験者	未体験者
大学の時間が忙しい	30.7	53.4
親の理解が得られない	2.5	2.3
先生の理解が得られない	1.4	0.9
人間関係がうまくつukれない	8.2	9.3
情報が不足している	27.2	43.0
活動に要する技術や知識がない	34.2	46.1
活動資金がない	17.6	37.8
身近に相談する人がいない	10.9	19.4
やりたい活動がない	8.0	15.7
安全の問題が心配	4.2	7.8
その他	6.0	3.1
特に問題はない	22.2	4.4
無回答	0.7	0.7

(複数回答) ※単位は全て%

表12 ボランティア活動の障害要因
(徳山大学生)

	体験者	未体験者
大学の時間が忙しい	21.7	16.2
親の理解が得られない	1.6	0.9
先生の理解が得られない	1.2	0.9
人間関係がうまくつけない	7.0	5.2
情報が不足している	24.8	29.3
活動に要する技術や知識がない	20.2	27.1
活動資金がない	10.5	11.0
身近に相談する人がいない	5.0	4.8
やりたい活動がない	11.6	14.8
安全の問題が心配	4.7	3.1
その他	5.8	6.6
特に問題はない	22.5	14.0
無回答	10.1	21.4

(複数回答) ※単位は全て%

(6) 徳山大学生がボランティア活動を始める時の情報源について

それでは、彼等がボランティア活動を始めるに当たって、どのようなところから情報を収集したのだろうか。その情報源を調査してみた。

体験者の中では「友人から聞く」(18.6%)が一番多く、次いで「ボランティア体験者に聞く」(14.0%)、「地域の回覧板などを読む」(12.4%)などの順になっている。体験者たちは、比較的自分の身近なところで情報を得ようとしているようだ。

一方、未体験者は「雑誌・新聞を読む」「地域の回覧板などを読む」「ボランティア体験者に聞く」が同数の11.8%で、「友人から聞く」が意外に低く、9.6%であった。これらの数字から推測されることは、マスメディアや行政、

ボランティアの専門家たちの情報を頼りにしようとしていることである。即ち、未体験者たちにとって、ボランティア活動は、まだまだ身近な活動ではないということではないだろうか。

他方、全国調査の体験者の中では、徳山大生と同じように「友人から聞く」(36.2%)、「地域の回覧板などを読む」(21.6%)、「ボランティア体験者に聞く」(19.0%)が上位を占めている。また未体験者においては「雑誌・新聞を読む」(46.1%)、「友人から聞く」(34.8%)、「テレビ・ラジオを利用する」(28.1%)、「ボランティア体験者に聞く」(27.9%)、「都道府県などの広報紙を読む」(25.1%)と続いている。ここでもやはり徳山大生と同じような傾向が見られる。

表13 ボランティア活動を始める時の情報源
(内外学生センターによる全国大学調査)

	体験者	未体験者
雑誌・新聞を読む	19.4	46.1
テレビ・ラジオを利用する	11.1	28.1
インターネットなどを使う	5.7	23.2
地域の回覧板などを読む	21.6	23.4
都道府県などの広報紙を読む	14.9	25.1
ボランティア情報紙などを読む	7.4	18.6
ボランティア関係のイベントに参加する	15.7	15.0
学内のボランティア窓口に相談する	13.1	12.3
学外のボランティア窓口に相談する	2.5	3.2
友人から聞く	36.2	34.8
家族・親戚から聞く	14.5	11.7
ボランティア体験者に聞く	19.0	27.9
その他	13.7	0.8
わからない	3.1	5.3
無回答	0.5	0.7

(複数回答) ※単位は全て%

表14 ボランティア活動を始める時の情報源
(徳山大学生)

	体験者	未体験者
雑誌・新聞を読む	9.3	11.8
テレビ・ラジオを利用する	4.7	12.7
インターネットなどを使う	2.3	6.6
地域の回覧板などを読む	12.4	11.8
都道府県などの広報紙を読む	3.9	6.1
ボランティア情報紙などを読む	2.3	10.0
ボランティア関係のイベントに参加する	11.2	6.6
学内のボランティア窓口に相談する	8.9	4.8
友人から聞く	18.6	9.6
家族・親戚から聞く	7.4	3.1
ボランティア体験者に聞く	14.0	11.8
その他	14.3	2.6
わからない	15.1	29.3
無回答	10.9	23.6

(複数回答) ※単位は全て%

(7)徳山大学生のアルバイトとボランティア活動の優先度

現代の大学生の生活において、アルバイトは必修科目であるようだ。そんな生活の中で、徳山大学生においては、ボランティア活動がどんな位置付けになっているのだろうか。

アンケート結果によれば、体験者では「アルバイト優先」(31.4%)が一番多く、次いで「どちらかといえばアルバイト優先」(24.1%)となっている。両方を合わせると55.5%となり、半数以上の学生がアルバイト優先の意思を明確にしている。

反対に「ボランティア活動優先」(7.8%)、「どちらかといえばボランティ

「アルバイト優先」(6.2%)が、合わせると14%となっている。やはり、大学生にとってアルバイトへの魅力は強く、ボランティア活動は二次の関心になっているようである。

未体験者になると、この傾向は、ますます顕著となる。「アルバイト優先」(35.4%)、「どちらかといえばアルバイト優先」(22.3%)が、合わせると57.7%であるのに対して、「ボランティア優先」(1.3%)、「どちらかといえばボランティア優先」(2.2%)は、合わせると3.5%となり、その差は極端に大きくなっている。この数字の意味するところが、未体験だからアルバイト優先なのか、アルバイト優先だから未体験なのかは分からないが、いずれにしても現在の徳山大生の多くは、アルバイトの方に強い関心を向けているようである。

表15 アルバイトとボランティア活動の優先度
(徳山大生)

	体験者	未体験者
ボランティア活動優先	7.8	1.3
どちらかといえばボランティア活動優先	6.2	2.2
どちらかといえばアルバイト優先	24.0	22.3
アルバイト優先	31.4	35.4
わからない	25.2	24.4
無回答	5.4	14.4

※単位は全て%

(8) ボランティア活動の社会的役割について

現在日本においては、家庭の主婦を中心としてボランティア活動が行われている。今後ますます若い生産的労働者が減少していくなかで、果たして、それら生産的労働力をボランティア活動に従事させられるほどの余裕が日本

経済にあるだろうか。そんな素朴な疑問から私は、その担い手を高等教育機関の学生たちに求めたのであるが、徳山大学生たちは、今後のボランティア活動をどのように考えているのだろうか。そこで、これからの日本社会においてこの活動の社会的役割について聞いてみた。

彼等の多くは、その社会的役割は今後ますます「大きくなると思う」（体験者67.4％、未体験者52.4％）と答えている。反対に「大きくなると思わない」（体験者8.5％、未体験者8.3％）と答えた学生は少数であった。徳山大学生たちも、近未来の日本社会においてボランティア活動が重要な役割を担うことになるだろうという自覚を持っているようである。

表16 ボランティア活動の社会的役割
(徳山大学生)

	体験者	未体験者
大きくなると思う	67.4	52.4
大きくなると思わない	8.5	8.3
わからない	18.2	24.5
無回答	5.9	14.8

※単位は全て％

(9)国や市町村のボランティア活動支援の要望

現在の日本のボランティア活動は、国や都道府県あるいは市町村などの強い挺いれによって成り立っているところがある。本来、ボランティア活動は市民の自発的な行為によって行われるべきものであるが、そこには日本特有の姿が展開されているのである。そこで徳山大学生に国・都道府県・市町村などのボランティア活動への支援方法を聞いてみた。

この項目は、アンケート回答者全員の数字で見てみよう。一番多いのが「ボランティアの情報を提供する」(29.8％)で、次いで「ボランティア活動

の教育を広める」(26.1%)、「社会的環境の整備を行う」(22.2%)、「経済的援助をする」(20.0%)となっている。

他方、全国調査では「ボランティアの情報を提供する」(57.8%)が一番多く、次いで「活動者に向け研修会を開く」(37.3%)、「経済的援助をする」(35.4%)、「ボランティア活動の教育を広める」(20.7%)となっている。

これらの回答の中で、徳山大生は「活動者に向け研修会を開く」(11.5%)が少ない。彼等は、あまり研修会に関心がないようである。

表17 国や市町村のボランティア活動支援についての要望
(内外学生センターによる全国大学調査)

	全国大学
活動者に向け研修会を開く	37.3
ボランティアの相談をしやすいにする	17.7
ボランティアの情報を提供する	57.8
経済的援助をする	35.4
ボランティア活動の教育を広める	20.7
活動の場所を確保する	16.9
活動中の事故に対する保険を充実する	15.7
希望者の登録制度を実施する	14.6
リーダー育成に対する援助をする	7.2
啓発・意識向上などのキャンペーンをする	15.2
社会的環境の整備を行う	17.5
その他	0.9
わからない	1.6
特になし	1.0
国・市町村は直接関わらないほうがよい	2.3
無回答	0.3

(三つ以内回答) ※単位は全て%

表18 国や市町村のボランティア活動支援についての要望
(徳山大学生)

	徳山大学生
活動者に向け研修会を開く	11.5
ボランティアの相談をしやすいにする	13.1
ボランティアの情報を提供する	29.8
経済的援助をする	20.0
ボランティア活動の教育を広める	26.1
活動の場所を確保する	14.8
活動中の事故に対する保険を充実する	8.9
希望者の登録制度を実施する	7.6
リーダー育成に対する援助をする	7.2
啓発・意識向上などのキャンペーンをする	11.9
社会的環境の整備を行う	22.2
その他	2.5
わからない	10.5
特になし	9.4
国・市町村は直接関わらないほうがよい	1.8
無回答	7.6

(三つ以内回答) ※単位は全て%

(10)大学とボランティア活動

先にも述べたように、私は大学教育にボランティア活動を取り入れ、現在まで試行錯誤の中で、一応のカリキュラムを作成してきた。しかし、これらの活動を行えば行うほど、多くの疑問や矛盾を抱くようになった。その疑問や矛盾をここで詳しく述べる余裕はないが、端的に言えば、このまま大学教育の中でボランティア活動を続けていっていいものだろうかということである。このような点について、私は次のような設問で学生に問うてみた。

(イ)「大学とボランティア活動について」

(ロ)「大学に対する要望」

(ハ)「ボランティア活動における学生の特色・長所を生かす方法について」

まず(イ)では、回答者全員のうち「大学がもっとボランティア活動を奨励すべきである」が37.8%、反対に「大学はボランティア活動を奨励すべきではない」は8.2%にとどまっている。ただ「わからない」が39.6%と多いのが気になるところである。

次に(ロ)では「大学がもっとボランティア活動を奨励すべきである」と答えた学生のうち54.9%が「ボランティアの情報を提供する」であった。次いで「ボランティアについて授業などで教える」(50%)、「活動希望者に対して研修会を開く」(34.2%)、「単位を認定する」(33.7%)、「ボランティアを行う学生を積極的に評価する」(33.2%)となっている。

これらの数字は、一応現在の大学教育としてのボランティア活動を評価していると考えられる。

さて最後の(ハ)についてであるが、学生たちは自分たちの「知識や趣味を生かす」(38.8%)ことや「若さや体力を生かす」(38.2%)こと、さらには「友人やグループ活動の仲間関係を生かす」(34.1%)ことで、ボランティア活動を行っていきたいと考えているようである。

表19 大学に対する要望
(内外学生センターによる全国大学調査)

ボランティアについて授業などで教える	21.2
活動希望者に対して研修会を開く	46.9
ボランティアの相談をしやすくする	26.5
ボランティアの情報を提供する	64.3
単位を認定する	22.2
ボランティアを行う学生を積極的に評価する	16.6
その他	1.9

特にない	3.6
無回答	0.3

(複数回答) ※単位は全て%

表20 大学に対する要望
(徳山大学生)

ボランティアについて授業などで教える	50.0
活動希望者に対して研修会を開く	34.2
ボランティアの相談をしやすいにする	26.1
ボランティアの情報を提供する	54.9
単位を認定する	33.7
ボランティアを行う学生を積極的に評価する	33.2
その他	3.3
特にない	28.3

(複数回答) ※単位は全て%

(1)大学生ボランティア活動の課題

①受益者負担の原則を確立

徳山大学生のボランティア活動への関心と理解についてアンケート調査を中心に述べてきたが、それらから読み取れる今後の課題を検索してみよう。

まず、ボランティア活動の未体験者がまだまだ多いことである。だからといって、彼等を何がなんでも体験者にさせなければならないというのではない。ボランティア活動への参加と同時に、その意味を充分考える機会を持たせたいと思うだけである。

彼等の多くは、親の仕送りで経済生活が支えられているため、経済的にはぎりぎりの生活が強いられている。しかも初めての経済的自立生活であることから、どうしても経済的なものに関心が向いてしまうのである。その上、

市場には、短期的な労働力需要があふれており、彼等は、その市場で自らの労働力が貨幣になることを知ってしまう。そしてそこで得た収入を自分の所得として、独立した自分の生活に当て、経済的豊かさの快楽と利便さを覚えてしまう。このように多くの学生たちは、大学時代の4年間、経済的価値にのみ関心を持ち、アルバイトに精出すのである。ところが、ボランティア活動に対して、その実費の支給や謝礼に関する意識では、本文では述べなかったが、「実費ぐらいなら受け取ってもよい」と答えた学生が10.1%と少なく、「一切受け取るべきではない」が19.1%、「一概にいけない」が42.1%、「わからない」が20.5%となっている。この数字からでも分かるように、彼等には、ボランティア活動は、本来、報酬を受けるものではないという意識が強く働いている。このため経済的価値観が優先される大学時代には、ボランティア活動よりもアルバイトによって得られる収入に、その関心が向けられるのである。

今後のボランティア活動のあり方についても、以上述べたような学生生活の実態を考慮して、学生に経済的負担を強いるようなものであってはならないと思う。この活動に必要な経費は、受益者負担の原則を確立させていくことが重要であると思われる。

② ボランティア学習の必要性

ボランティア活動未体験者に、体験への道を開くためには、ボランティア活動の意義を良く理解させることが必要である。即ち、経済的価値観優先の彼等に対して、それ以外の価値観も存在すること、そしてそれが自分を含めた人間社会にとって、どれ程重要であるかを理解させることである。そのための手段として——今回の調査結果でも見られるのであるが——彼等も「ボランティアについて授業などで教える」ことを望んでいるように、大学教育の中でも、何らかの形で、ボランティア学習を位置付けしていく必要があると思われる。

③ ボランティア活動の情報管理

そして、実際にボランティア活動を体験してみたいという学生に対して、どこで、どのようなボランティア活動が必要とされているかを、分かり易く知らせる情報整備がなされなければならない。今回のアンケート調査でも、大学に対する要望では「ボランティアの情報を提供する」（54.9%）が一番多い、また彼等がボランティア活動を始める時の情報源も「友人から聞く」や「ボランティア体験者に聞く」などが多く、これらのことから、彼等は、ごく限られた世界からしか情報が得られず、もっと豊富な情報を手軽に得られることを望んでいることが分かる。

そこで、大学には、アルバイトや下宿の紹介などの情報を管理・整備し、学生が自由にその情報を利用できるようにする機関があるが、ボランティア活動においても同様に、大学が情報を収集し、その情報を学生に伝達する機関を設置すれば、学生は、いつでも容易にボランティア活動の情報を知り、自らの意思で、それらの活動に参加できるのではないだろうか。